

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

## カルタヘナ・デ・インディアス：英雄たちの墓場

KUNO, Ryoichi / 久野, 量一

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

78

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

403

(終了ページ / End Page)

413

(発行年 / Year)

2011-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007131>

## 【研究ノート】

## カルタヘナ・デ・インディアス

## — 英雄たちの墓場

久野量一

大きな世界地図を眺めてもカルタヘナ・デ・インディアスがどこにあるか、とてもさがしだせないだろう。小さな地図があったとして、南米大陸の北端のグアヒラ半島の海岸線を西方にたどってゆくと、リオアチャ、サンタ・マルタ、バランキーリャと街がほぼ等間隔に点在している。その次に出てくるのがカルタヘナだ。街の北側には沼地シエナガが広がり、南側はえぐるように海に切り取られ、まるでカリブ海にはみ出すように浮かんだ、小さな花びらのような土地である。行政上のカルタヘナ市はもう少し内陸部も含んでいるが、観光客が訪れるのは花びらひとひらの要塞都市ラ・シウダー・アムラリャーダ＝旧市街だけだ。

「カルタヘナは、コロンビア、いやラテンアメリカでいちばん美しい街のひとつです」。ガイドブックを開けば、ほぼ間違いなくこんなふうに書かれている。

『英雄都市ラ・シウダー・エロイカ』はみなさまを歓迎しております」。カルタヘナのラファエル・ヌニェス国際空港に着陸すると、こう機内アナウンスが流れる。自動で流れる音声テープだけれど、誇らしげな口調に聞こえるのは錯覚だろうか。

英雄都市——カルタヘナに到着したとたんこの呼び名をいやでも頭に叩き込まれる。そしてこの来歴を補強するように、小さなカルタヘナの街には英雄が遍在している。

はじめてカルタヘナを訪れてから、かれこれ十年が過ぎようとしている。それ以来、ここに幾度となく足を踏み入れ、ふと馴染んだ瞬間も生まれかけているような気がするが、この「英雄都市」という表現を聞くと、一線を引かれたかのように観光客気分引きもどされる。

だが観光客でしかないのは当たり前だ。馴染もうなどという思いこそ僭越なのだ。文学研究者と自称して書籍という名のデータを買ひ漁り、自己の「利潤」のみを追求するだけで、観光客にすらなろうとしない人種がカルタヘナの人にとってありがたいわけがない。胸を張って観光客として「英雄」という重い扉をまず開けるのが、この街にかかわろうとするときの流儀である。

## 英雄都市

空港で手に入るありきたりの歴史書によれば、1811年11月11日、カルタヘナの民衆は支配層のクリオーリョ（新大陸生まれのスペイン人）を扇動してスペインからの独立を宣言させ、これにより、クリオーリョ主導の自治政府が誕生した。しかし再征服をもくろむスペインは、1815年、軍人パブロ・モリーリョを送り込み、カルタヘナを数ヶ月間にわたって兵糧攻めにする。この作戦によって数千人が命を落とした。再び植民地となったカルタヘナは1821年、グラン・コロンビア共和国の成立とともにようやく植民地時代に終わりを告げることになる。スペインに対するカルタヘナの英雄的な戦いに敬意を表し、解放者シモン・ボリーバルは、カルタヘナを「英雄都市」と呼んだ。11月11日はカルタヘナの独立記念日である。

シモン・ボリーバルは、カルタヘナ最初の独立直後の1812年、この場所で「カルタヘナ宣言」をあらわし、そのなかで独立したばかりのベネズエラ第一共和制が崩壊に追い込まれた原因を分析した。この政治的文章を機に彼の軍人としての才覚があらわれるようになったと言われている。のちの有名な「ジャマイカ書簡」執筆の3年前のことである。

カルタヘナ旧市街のほぼ真ん中に、ポリール本人の名前を冠されたポリール公園、いわゆる中央広場がある。シモン・ポリールの騎馬像はその広場の中央に飾られている。「わたしに命を与えてくれたのはカラカスだが、わたしに栄光を与えてくれたのはあなたたち[カルタヘナの人たち]だ」と、彼の言葉が台座に刻まれている。こぢんまりとした広場の正面には、同じく本人の名前を戴いたポリール県の県庁舎もある。

政府のお墨付きを得て20世紀半ばまで広く読まれたコロンビア史にはこのようにある。「カルタヘナ——正統なる誇りとともに『英雄都市』の名をほしいままにし、ポリール県の県都であるこの名高き都は、1533年、マドリード出身のペドロ・デ・エレディアによって創設された」(Henao y Arrubla, *Historia de Colombia*, p.71)。1509年にアロンソ・デ・オヘーダが征服に失敗してから24年後、ペドロ・デ・エレディアは先住民の住むこの集落をあっさり征服して街を建てた。

たとえばメキシコを征服したエルナン・コルテスの像がメキシコシティにあるとは想像できないが、カルタヘナではそうではない。旧市街の入り口の、かつては奴隷市場だったところに、大きなエレディア像が立ちほだかっている。強い日差しを遮る背の高い樹木に囲まれた解放者ポリールリベルタドルよりも、だだっ広い場所に邪魔物もなくそびえたつ征服者のほうコンキスタドルのほうが存在感は圧倒的に大きい。エレディアにはまだ記念物がある。もとはメルセス会の修道院だった建物が、カルタヘナ創設400年を記念して1933年に「エレディア劇場」に改修されている。

ペドロ・デ・エレディアがカルタヘナを征服したとき、先住民の女性を通訳として間に立った。征服者側の記録ではその名をインディア・カタリーナという。メキシコを征服したエルナン・コルテスのかたわらではマリンチェという女性を通訳をつとめていたが(スペインに協力したことで彼女は裏切り者と呼ばれた)、カタリーナもほぼ同じ位置にいた。あるいは北米のポカホンタスを思い出してもいいかもしれない。カタリーナはエレディアの甥と結婚してスペインに渡ったことまではわかっているものの、

その後の消息は知られていない。彼女の存在が急きょクローズアップ（ねつ造？）されたのは、20世紀の半ば、この地を国際的映画祭の開催地にするときに何かシンボルが必要になったからだ。肖像画が残っていなかったため、実物に忠実な像の制作は不可能だった。そういうわけで、いまカルタヘナにあるのはインディア・カタリーナ記念像である。カルタヘナ旧市街と内陸を結ぶ、その名もペドロ・デ・エレディア通り——ここにもエレディアがいた——にあるバスターミナルの真ん中に置かれている。男のポリバルやエレディアは着衣なのに対し、スペイン風の服装をしていたはずの女のカタリーナはなぜか裸である……

城塞跡を見ることなしにカルタヘナを歩き回ることにはできない。これらは16世紀以降、カリブ海に跋扈した多くの海賊たちから街を守ることを目的に建てられた。街をぐるりと取り囲む城壁はただでさえ暑いこの熱帯の街の風通しを悪くする。軍事的な必要性がなくなってからはなおざりにされ、いつしか浮浪者のねぐらやごみ捨て場に成り果てた。衛生的な近代都市の開発にとっては障害でしかないと、破壊を命じた市長さえいた。だが、その後の世界的な観光ブームの到来とともに、これらの城壁や要塞が軍事とは異なる意味で街を守ることがわかり、改修が進んでいった。メキシコのカンペチェやキューバのハバナにある要塞群と比べるとかなり傷んでいるものの、いまやこの巨大なサンゴ石の塊こそは、フランシス・ドレイクら海賊＝英雄の遺した莫大な財産というわけである。

この要塞は別の英雄や武勇伝も浮かび上がらせる。たとえば軍人プラス・デ・レソ。彼はカルタヘナがイギリスの海軍提督エドワード・ヴァーノンに襲われたとき勇敢に戦い、街を守ったという。サン・フェリペ要塞のふもとにはサーベルを振り上げるレソの銅像が配置されている。

1571年、作家になる前のセルバンテスはレパントの海戦に軍人として加わって英雄的に戦った。その後、紆余曲折ののちに文筆に活路を見出そうとするも、当時勢いのあったロペ・デ・ベガにはかなわなかった。そこで彼が目をつけたのが新大陸での仕事だった。彼はカルタヘナの職を候補の

ひとつに選び、1590年5月、スペイン国王宛てに書簡を出して訴えた。しかしその希望はかなえられなかった。というのもそれから2年前の1588年、アルマダの海戦でスペインの無敵艦隊はイギリスに破れ、スペイン帝国は衰退の一途をたどり始めていたからだ。

そのアルマダの海戦で無敵艦隊を撃沈した張本人がフランシス・ドレイクだった。私掠船に乗り込んでいたドレイクは二度にわたってカルタヘナを襲撃している。2度目の1586年2月、灰の水曜日の襲撃の際には、不意打ちで街に上陸して掠奪を行いイギリスに凱旋していた。もしこのときカルタヘナ側の立てた作戦が功を奏していれば、セルバンテスはカルタヘナに来ていたかもしれない。そうすればいま世に出ている『ドン・キホーテ』は生まれなかったにちがいない。

そのセルバンテスも生前の目的をついにかなえた。2007年、スペイン語国際会議が開かれたのを記念して、ペンを握って書斎机に向かうセルバンテス像がエレディア像から目と鼻の先にある、コロンビア独立百年を記念して整備された「百年記念公園」近くに設置された。かつてフェリペ二世に拒まれたカルタヘナの職が、四百年の時をこえてようやく認められたわけである。

## 入れ物としての街

解放者、征服者、海賊、文豪……いったいカルタヘナにはどれほどの数の英雄が眠っているのだろうか。カルタヘナは街全体が歴史上の英雄を陳列する墓場のようなのだ。『文学散歩としてのカルタヘナ』（2007）という本を開けば、いま挙げてきたようなカルタヘナの名所旧跡についてさらに詳しく知ることができるだろう。そこでは、コロンビアの作家たちが使ったカルタヘナの出でくる場面が引用され、写真やイラストも付け加わり、観光ガイドブックとしては確かに有益なものになっている。

だが建築家のヘルマン・テジェス（1933～）は、カルタヘナの建築物を

集めた写真集に寄せた文章で、英雄都市カルタヘナという観方に留保をつけている。

カルタヘナ・デ・インディアスは末裔たちに、伝説と武勇伝、無名の影と存在からなるかげがえのない遺産を残している。歴史学者や語り部たちがペドロ・クラベール [イエズス会士。黒人奴隷を援助した] や片手んぼうで片足のドン・プラス [前出、軍人プラス・デ・レソ]、ヴァーノン [前出、イギリスの海賊・軍人]、デュポアン [フランスの海賊]、才知あふるる郷土ドン・アントニオ・デ・アレバロ [要塞の設計にかかわった軍人] について話すのを聞くと、わたしたちはカルタヘナというのが本当は、商人や物売り、代書屋や修道士、兵士や奴隷、売春婦や船乗り、そして密輸商人の街であることを忘れてしまいかねないのだ。英雄性——とりわけスペイン的英雄性（こちらの方が三倍の大きさはある）——というのは、その資産の一部でしかない。しかし、もはや実体はないとはいえ、いまだ有効な資産を用いてカルタヘナはいま観光地として金を稼ぎ、街の本質に虚飾を施しているのだ。(Gérmán Téllez, *La Historia de Frente*, p.6)

ラテンアメリカでいちばん美しい街だとされる理由を考えてみる。機能を重視しただけの無機質な味気ない建築物は数少ない。このことは確かにこの街に揺るぎない趣きを与えている。テジェスもカルタヘナという街と、その建築物を支配する統一的美観には価値を置いている。街の小ささも美点のひとつだろう。歩いて回ることでできる距離圏に、港、砂浜、居住地、そして都市機能がある。まるで自分の屋敷の中庭のなかにひとつの宇宙をもっているかのような優越感さえ味わえる。向かいのバルコニーと触れるかのように細く、入り組んだ小道、街角の壁には通りの名を刻んだ小さなプレートがはめこまれている。背が低く、蔦のからまる長屋のような家並みと窓を覆う木の格子、オレンジ色の教会ファサード、黄色い壁に青いラインの入った芸術学校、水色のペンション、そして石畳……

しかしこういうふうには街の魅力を把握することは、テジェスが言うように、街の本質ともいえる、生きて血の通った人びとを除いていることを意味している。街路で物を売ったり、ドミノをやったり、ただぼんやり座っているカルタヘナの人びとを、まるで箱庭に並んでいる人形のように見ている。テジェスは警告する。「カルタヘナの要塞はひとつの見世物であり、そのようなものとして観察されねばならない。しかし、樽を作る木材がワインの入れ物であってワインでないように、街の包みは街ではない」。

カルタヘナに在住の詩人でジャーナリストのタティス・ゲーラ（1961～）もまた、カルタヘナが英雄と要塞都市からのみ語られることを拒絶しようとする。1533年以降の話ばかりが話題になるが、それ以前のことについてはほとんど話にならない——こう彼は指摘する。確かにカルタヘナでは「征服」という表現を聞かない。このカルタヘナでも先住民族に対する征服があったにもかかわらず、スペインによる植民都市の「創設」がまるで国の出発点だったかのように街全体が主張している。タティス・ゲーラは、街に飾られる英雄たちの裏の顔を明かす。カタリーナは太っていて美人ではなかった、アフリカ系の人びとに対してもっとも極悪非道に振る舞ったのがブラス・デ・レソだった、と。

カルタヘナでいま取りざたされるのは征服よりもむしろ、元は奴隷として連行されたアフリカ系の人びとに対する差別の過去と現在にどう向き合うかだ。要塞都市を一步出ると貧困地区が広がっている。たとえば、この数十年のあいだ熾烈を極めていたゲリラと準軍部隊パラミリターレスの争いによって、土地を追われた人びとが身を寄せあう地区パリオが有名である。国際的NGOの支援もわずかに受けているが、電気や水道、ガスといった最低限のインフラも不確実な貧困地区だ。この地区の名は「ネルソン・マンデラ」という。この地区に住んでいる大多数がアフリカ系であることと関係して、カルタヘナとなんの縁もない黒人解放運動指導者の名がつけられたらしい。

やはりカルタヘナに在住の作家オスカル・コジャソス（1942～）の小説



に『怨』（2006）がある。ひとことで内容をまとめてしまうと、この貧困地区出身の少女の、暴力と貧困に追い立てられる絶望的でつかの間の人生を描いたものだ。あてどなく旧市街をうろつき、観光客相手に体を売り、薬に手を出す少女たち、あるいは犯罪に巻き込まれ死んでゆく少年たち。通俗的だが、要塞の外に暮らす無名の者たちから見た地獄としてのカルタヘナを露悪的にさらしだしたものと読むべきだろう。この小説がある程度の読者を確保している事実は、観光客のためではないカルタヘナ、英雄や要塞とは異なる、言わば社会問題としてのカルタヘナに目を向けるべきだと感じている人びとが少なくはないことを示している（もちろん目を向けたそのあとどう行動するかが重要であるが）。こういう小説の一節が先に挙げた『文学散歩としてのカルタヘナ』に引用されることはない。

### コンベンション・センター

内容物ではなく入れ物としての街の在り方を決定づける建造物がある。カルタヘナ・コンベンション・センターだ。スペイン語ではセントロ・デ・コンベンシオネス（Centro de Convenciones）という。国際会議や映画祭、ミス・コロンビアの戴冠やコンサートなどが催される、世界中のどこにでもある近代的な施設である。1982年、米州開発銀行の年次総会がこけら落としだった。

霊廟と見まがうほどのこの不気味な建物があるのは、旧市街を扇に見立てたときの要の位置の、アニマス湾に面するペガスス埠頭である。建物正面にはカルタヘナに似つかわしくない巨大な広場があるが、フェンスで一帯が囲われているために近づけない。正面玄関は国家元首など要人が訪れたときのみ開かれるらしい。そのせいで建物とのあいだに不思議な距離感が生まれ、大きいのか小さいのか、全貌が把握しにくい。威圧的な外観で表情のないところからファシズム建築とも言われている。カルタヘナ国際映画祭のときに何度か入ったことがあるが、一般の人びとの入り口は脇に

小さくあって、まるで勝手口から入っているようだった。

興味深いのは、この比較的新しい建物が建つ前にいったいここに何があったのか、ほとんど知られていないことだ。数百年前の要塞跡や歴史的記念碑が日に日に新しく姿を現しているにもかかわらず、つい2、30年前にあったものは、きれいさっぱり忘れ去られている。かつてのカルタヘナに思いをはせるある作家のエッセイを引いておこう。

わたしにとってカルタヘナ・デ・インディアスでいちばん懐かしい片隅といえば、アニマス湾の埠頭である。そこにはついこの前まで騒々しい中央市場があった。日中は呼び声や叫び声が飛び交って色彩豊かな祝宴が繰り広げられ、カリブ圏でもわたしの記憶にないほどの人波でごった返していた。夜は夜で酒呑みと新聞記者にとってはまたとない食事処になった。露天の食卓の真正面にはスクーター船がずらりと並び、夜明けになると猿やバナナ、年端のいかない売春婦たちを積んで出港していった。(中略) 空に星の輝く夜明けどきに腰を落着けると、口は悪いけれど気立てのいいオカマの料理人が耳にカーネーションを差したまま手際よく食事を用意してくれた。焼いた肉に玉ねぎの輪切りを載せて、バナナフライが添えてある。わたしたちはそれをほおぼりながら、そこで聞いた話をネタにして次の日の新聞をでっちあげたものだった。(García Márquez, *Un domingo del delirio*)

ここには市場いちばがあった。いくつかの資料によれば、このヘッセマニ市場は1904年に建てられた。往時を偲ばせる写真すら出てこないため、いまカルタヘナにある別の市場をもとに想像するしかないが、外観は巨大で殺風景な倉庫だったはずだ。埠頭だから、船から直接荷降ろしができる設備もととのっていただろう。倉庫のなかは仕切りで区切られて、ところ狭しと店が並ぶ。大家族全員で切り盛りするような店ばかりだ。売り物を身体じゅうにぶらさげたり、荷車に載せて運ぶ商人たちが狭い通路を行き交って

いただろう。しかし20世紀の半ば、火事や爆破事故が相次いで、死者を出したり、物売りたちが市場の外までパラソルを並べて占拠するのが問題になって移転が決まる。要塞の外に追い払われたのは1976年のことである。

市場<sup>いちば</sup>を解体してコンベンション・センターを建てるというのは、ハコもの街カルタヘナらしいエピソードである。市場が生きた人間たちの暮らしを映し出し、人間臭さの充満する決定的な場所であることはいまさら言うまでもないだろう。市場の主人公は建造物という包みではなく、そこにいる内容物たる人間なのだから。

カルタヘナの街の浄化はいたるところにおよんでいる。ペガサス埠頭にも魚を食べさせる露店が並んでいたが——おそらく市場があったときのなごりだろう——、いつの間にか退去させられている。エレディア通りの物売りたちも要塞外への立ち退きを余儀なくされている。大きなイベントが催されるごとに人間は追い出され、かわりに記念碑が飾られ、要塞はひときわ輝きを増す。

歴史に登場する英雄のみが葬られる墓場、そこをカルタヘナと呼ぶのである。

## 〈参考文献〉

- 牛島信明『ドン・キホーテの旅——神に抗う遍歴の騎士』中公新書，2002年。
- ジェンキンソン，ランカスター，スコット，ホーキングズ，ドレイク『イギリスの航海と植民 一（大航海時代叢書 第二期 17）』岩波書店，1983年。
- Ávila Domínguez, Freddy, “Bazurto un “arroz con mango””, *Revista Noventaynueve*, No.7, Febrero de 2007, pp.20-26. (<http://www.revistanovenyaynueve.org/7/index.htm>)
- Carrión, María, “Barrio Nelson Mandela : A Community of Survivors”, *NACLA Report on the Americas*, Vol XXXIV, No 2, September/October 2000, pp.43-48.
- Collazos, Óscar, *Rencor*, Seix Barral, Bogotá, 2006.
- García Márquez, Gabriel, “Un domingo de delirio”, *Notas de Prensa*, Mondadori, Madrid, 1991, pp.70-72.
- Guía literaria de Cartagena con un recorrido personal de Germán Espinosa*, Aguilar, Bogotá, 2007.
- La Historia de Frente : Arquitectura de Cartagena* (fotografías de Antonio Castañeda Buraglia y textos del arquitecto Germán Téllez Castañeda), Letrarte Editores, Bogota, 2007.
- Henao, Jesús María y Gerardo Arrubla, *Historia de Colombia*, Librería Colombiana, Bogotá, 1929.
- Múnera, Alfonso, *El fracaso de la nación : Región, clase y raza en el Caribe colombiano (1717-1821)*, Planeta, Bogotá, 2008.
- Tatis Guerra, Gustavo, *La Ciudad Amurallada : Crónicas de Cartagena de Indias*, Ediciones Pluma de Mompos, Cartagena de Indias, 2002.